東奥日報社提供

東　奥　日　報
2018年（平成30年）7月5日　木曜日　（14）

地盤工学、土木工学の研究交流

地震対策が共通課題

八工大と姉妹校ユーラシア大

八戸市の八戸工業大学とカザフスタンの首都アスタナ市にある同大の姉妹校・国立ユーラシア大学（ＥＮＵ）による初の共同科学フォーラムが6月、ＥＮＵなどを会場に開かれた。両大の教授ら関係者約60人が出席、地盤工学や土木工学の分野で発表するなど交流を深めた。第2回は来年、八工大で開かれる方向だ。（若松清巳）

ＥＮＵで開かれたフォーラムの様子（八工大提供）

カザフで初のフォーラム

ＥＮＵのアスカル・ジュスベコプ教授が約30年前、八工大で地盤工学研究について学んだ縁で、両大は昨年6月、教育や学術研究に関する連携協定を締結。フォーラムは姉妹協定1周年を記念し両大が開いた。

現地に赴いたのは同大の柳谷利通理事長、長谷川明学長、橋詰豊講師。6月14～20日の期間中、ＥＮＵのほか旧首都アルマティ市にあるカザフスタン建築土木大学でのフォーラムに参加した。また現地の研究施設、軽量鉄道建設現場の視察なども行った。

フォーラムで八工大側は、地盤の液状化現象の危険性などについて発表した。八戸市や民間事業者と同大が協力し、公共工事などで行うボーリングで得られた地盤データを共有する「八戸地域地盤情報データベース」を説明したところ、出席者から質問が相次いだ。

長谷川学長は取材に「カザフ南部は過去に大地震に見舞われたが、地盤のデータは活用しきれていない。一方で人口増加は当初の想定を超える勢いで、対応した都市整備が求められる」と指摘。来年のフォーラムについて「地震を背景とした地盤情報活用、インフラ老朽化を見据えたまちづくりなどは共通テーマになる。多くの関係者に八戸を見てもらいたい」と期待を膨らませた。

※「この画像は当該ページに限って東奥日報社が利用を許諾したものです」